



Social Interaction and Patient Care

Edited by J.K. Skipper, Jr., R.C. Leonard

この本は 1965 年に発行されてからこれ迄に第 6 版が出ている。編集者は社会学者で Yale 大学の助教授で小児の研究と看護学を専攻してきた人達である。患者の疾病のみの治療から 1 人の人間とし接するためには患者の心理と院外での働きようを知らねばならないと指摘する。

この中では医師、看護婦、心理学者、精神科医、文化人類学者、社会学者が書いているだけでなく、症例として患者も 8 人参加しているのが特徴である。

中心となっている理念は医療従事者の絶対的権限から、知らされる権利をもつ患者の主張が読み取られるのである。

看護職が表面にでてはいるが、患者に接する職種ならどの職業にも役立つ内容をもっている。特に患者が書いた自己の症例は職業人からは想像できない心の動きが生々として書かれていて興味深い。たとえば病室のドアを

ノックもせず自己紹介もせずに入り込んで、その人側の仕事だけをさっさと片付けていくのを患者は唯驚きあきれるばかりなのである。

この 1 駒を見ても患者の心を理解し治療の協力態勢をうながす技術を職業人が持つべきであると思い知らされる。

その他に精神障害者の観察や治療法と施設病との関係、研究資料の集め方などが平易な文で書かれているので英文ではあっても理解し易い。

職員間や患者とのコミュニケーションが最も大切であるとされ、官僚的に流れないための施設組織内の活動領域と限界も明確に述べてある。一冊通して読むと新しい職業人の像がより一層人間味をもって患者に近づくのが理解できる。

(Lippincott, 399 頁, 5\$, 1965)

(府中リハビリテーション学院, 作業療法士 鈴木明子)

水中運動療法の実際

E. Bolton & D. Goodwin 著 荻原新八郎訳

水治療法に関する本で特にプールを主体とするものは少ない。この本は表題にあるように Pool Exercises について書かれたものである。初歩的な水中での訓練を図解入りで、わかり易く記載されている。

水中訓練というと、つい温熱の効果のみを重視した治療になり易く、患者と一緒にプールに入って訓練するのを敬遠してしまう場合がある。これは水中訓練に対する理解不足が問題となっていることが多分にあるのではないか。そういう点からしても、一度初心にかえって考える資料となる本である。

第 1 章いとぐち、水の性質を利用する訓練方法で、その目的意識を十分もつようにする。第 2 章水の物理学、比重とアルキメデスの原理、力のモーメント、静水学的圧力等についてふれている。第 3 章長所、9 項目に分類し水中訓練の本質を説いている。第 4 章禁忌症、第 5～6 章患者のケア、水温、室温をどうするか、消毒、治療

時間等の一般注意事項について連記してある。第 7 章プール設計にさいしての考慮事項。第 8 章訓練用器具、必要とされる器具を例挙しその各々の使用方法をあげている。第 9 章筋再教育のすすめ方、ここでは筋力強化と協調性の改善、その方法について。第 10 章運動の分離、第 11 章グループ訓練、第 12 章水中運動療法の実際、身体各部の運動方法を数例ずつ図解を沢山用い、各運動時の姿勢と運動方法を解説してある。第 13 章バード・ラガツ技法、ドイツで始められた水中筋再教育法を紹介しており、マンツーマンに依る訓練になるため欠点はあるが試みてみる必要のある技法と思う。第 14 章レクリエーション、となっている。

新しく水中訓練を始める方や、PT 学生にとっては良い教本となるであろう。

(医歯薬出版, 80 頁, 1,500 円)

(北村山公立病院, 理学療法士 駒沢治夫)